

ふるさと熊野

筆道資料の探訪

熊野筆の生立おいたち

昭和二十二年八月 熊野町商工会が建立した「毛筆元祖頌徳碑」によると熊野筆の創りは弘化（一八四四）の頃となっています。

その後、新しく発見された古記録や研究資料等で熊野筆の由来はそれより約十五年も早く、天保の初年には誕生していた事が解りました。

（再掲）

熊野筆の起りは今から約百六十年前に相当する天保元年ごろ天涯無宿の一介人が突然漂浪して熊野村にたどり着いた。

村に足を留めた同人は偶たまま毛筆製造の技術を心得ていたと見え生業として微に営んでいた。

また一説には「天保二年頃、安芸郡熊野村の『畑のよ』ナル者、筑前博多に出稼同所毛筆製造者久作ナルモノ（博多平助筆の職人哉）ト夫婦トナリ帰村の上本業ヲ創始セシカ兩人死没後再興者ナク中絶の姿ナリシモ天保四、五年頃、同村、孫井田才兵衛ナルモノ広島ヨリ吉田清藏ヲ伴ヒ帰リ本業ヲ起シつぎテ若島常太郎、胤森仁三郎ナルモノ奈良ニ於テ伝習ヲ受ケ帰リ本業ヲ営メルニ至リ爾来漸次普及発展ス」とあります。

吉田清藏について頌徳碑には「弘化の頃、広島研屋町に浅野家御用筆司に吉田清藏なる人物があった。

時に井上治平は之について製筆の法を学び又同じ頃、乙丸常太も攝津の有馬から製筆の法を修得し帰郷して村人達にこれを伝へた。

（安芸郡風教誌には乙丸常太郎及び井上弥助の両氏となっています）

町内

一、預ケ銀出入 願人 小橋屋喜兵衛

元銀 三ノ百七拾目

又銀 老ノ九百拾八匁

八匁 其御村方

ノ五ノ百四拾八匁

八匁 相手、中嶋屋才兵衛

右之通来ル御用日御出訴仕度段

申出候ニ付及御引合本人御糺申上下済

御取斗可被下候若不行届ニ候ハ、

無據出訴相致可申候否哉 奥書

御調印奉進上 以上

大阪

戊 二月 伏見両替町三丁目 印

芸州安芸郡熊野村

御 役 人 中

この文書は大坂、伏見両替町三丁目、小橋屋喜兵衛が去州熊野村の中嶋屋才兵衛に銀子を預けたが返済してくれないので訴え出たいと思ふが如何したものかと熊野村役人中に問合せたものと思われまふ。之の問題は熊野村役人の肝煎で工事(裁判)にならず無事決着したものと考えられ資料は孫井田家に残っています。

筆墨、油株について「旧記帖」

世良長兵衛

寛政三亥年(一七九二)

抑我者拾壹歳冬ヨリ寺人拾貳歳之春迄手習致ス、先生ハ呉地、藏屋権右衛門と申人

寛政六年(一七九四)春ヨリ

一、我等拾四歳ヨリ近村籠振り売買致ス是ハ父之オシヘ

寛政七年(一七九五)冬ヨリ

一、拾五歳ヨリ九州豊後へ墨筆商ニ下リ是ハ父ニ附テ行事(父長藏ハ四十五才)

同 八年(一七九六)極月一日の悪風

一、拾六歳九州行此時防州中之関ヨリ豊後渡海之初難舟にあひ、誠にあやうき命をのがれ翌年春比婦村致ス事、父諸共

寛政九年巳年(一七九七)春ヨリ

一、我拾七歳にて身をもらい自分一力の商ひになり此時父之讓と申而は立嶋布子壹枚、七五三嶋羽おり壹枚是は着俵之外なり、外に荷物仕入通広島卯市屋五郎右衛門殿所願み被下候此銀子三百目迄之キップ尤此銀者我之売払に致す事、此外は田嶋何々迄も親之讓は少も無之只自分之身分もらひ、かせき取と被仰下候事
右躰之儀に御座候得は今年ノ廿三才迄売買に無怠所々方々かけあ
るく事凡世にならびすくなし

同 十年(一七九八)

一、拾八歳ノ上方直仕入致ス大坂、有馬、奈良
今年迄ニ得銀壹ノ匁余出来ル

享和二年(一八〇二)冬

一、式拾三歳初而家持ニ成(十七才ノ今年迄凡得銀拾貫目程此銀田畑、商元、其外銀貸シ惣有物辻也)

金(小判)と銀(丁銀、豆板銀)等秤量貨幣の関係は当初四三匁が一両にあてられていたが実際は丁銀の品質による時価で両替されてい
ました。

長兵衛が墨筆行商で蓄めた銀子は金に換算して百六拾両余りの大金になりました。

一、式拾四歳 女房持

此女当庭高橋玄徳と申医師之三女其名「みわ」と申今年廿歳此高橋は重清之別家にして重清とも申す又は新屋とも申す尤も七月七日夜当家嫁ス

重清申は中みそ城の別家筋玄徳父作十郎児は千右衛門庄屋役致す其外兄弟多し(以下中略)

文政十二巳丑(一八二九) 秋初

一、居家普請再建 予五拾歳

熊野筆の生立は天保四、五年頃、孫井田才兵衛が広島藩御用筆司吉田清藏を伴ひ帰り一時中絶していた筆造りを再興した事に始まります。天保五年、毛筆製造の技術修得のため攝津有馬に佐々木為次を派遣したのは住屋貞右衛門(長兵衛)と当時の熊野村庄屋佐々木千兵衛でした。(千兵衛も為次の生家城之堀家も外の記録に高橋となっています)吉田清藏は藩の御用筆司であり、亦貞右衛門が藩宮新庄墨の御用懸り筆頭であった点、熊野筆は広島藩の内旨を受け安芸郡熊野村で生産が始まったと考えられます。

熊野村で生産された筆は国産新庄墨と共に伝統ある熊野村の行商人たちによって諸国に賣捌られました。

熊野筆は廃藩置県後の明治五年頃までも芸州筆として全国的に名声を博した。